

## ～高齢者の人権～

**「高齢になっても『何かしたい！役に立ちたい！』という気持ちがある。」（高齢者・Mさん）**

**「本人の気持ちに心を寄せながら、共に歩んでいければと思っている毎日です。夫に学ぶことばかりの日々に感謝です。」（介護するご家族・Aさん）**

※MさんとAさんは親子で、Aさんは若年性アルツハイマー型認知症のお連れ合いを介護しています。

皆さんは、高齢の方、特に認知症と診断された方の気持ちを考えたことがありますか。高齢の方などにはこれまでの長い人生で培った経験があります。楽しかったこと、得意なこと、頑張ったことが今も生きる支えとなっています。ただ、できないことが多くなり、変わっていく自分に不安を感じているのです。また、高齢者や障がいのある方を介護するご家族の支えも重要です。

Mさん

○仕事は何をされていたんですか。

自分は教員になりたくて大学に入りましたが、旧制中学4年の時に中耳炎を患い片方の耳が聞こえなかったため一度は夢をあきらめました。大学を卒業後1年で、幸いにも熊本の中学で理科の教師に採用されました。その後、大分県内各地の養護学校（現在の支援学校）教諭、県庁学校教育課での指導主事等を務め定年まで働きました。定年後は、兄が精神障がい者支援施設を立ち上げていたのでその手伝いをしました。

○長い間、教育に携わってきたのですね。退職後も子どもたちや地域との関わりはありましたか。

学校の評議員を長い間していたので、平和授業として1年生から6年生までの子どもに昔の話をしていました。自分は5年生に話をしていましたが、戦前・戦争中の害虫取りや桑の皮から繊維を取り軍服を作る話などをしました。実際に妻や娘と共に苦労して桑の木を探してきて子どもたちに見せたりもしました。教員時代の経験を活かして教材作りをしていたので好評でした。支援施設でもリハビリ等を兼ねて行うゲームを手作りして、利用者の方に喜ばれました。また、今も住んでいる地区内の評議員に選出され、地域活動に率先して参加しています。

○最近運転免許証を返納されたそうですね。

86歳の誕生日をきっかけに、運転免許証を返納しました。ちょうど高齢者の事故がニュースで取り上げられることが多く、家族から説得されました。自分としては大丈夫とと思っていましたが、「今まで大きな事故も起こさずここまでこられたのは幸せ。事故を起こす前に返納した方がいいんじゃない？」という妻の言葉で決心しました。しかしながら車が使えないので、地区の草刈りに草刈り機を持って行くすべがない。運転ができなくなるだけでなく、そのほかにもできなくなることが増えます。いろいろな資格や肩書きをなくすたびに、できることが少なくなっていくさみしさを感じます。

○周囲の方に理解してほしい、わかってほしいことはありますか。

高齢になっても、「何かしたい！社会の役に立ちたい！」という気持ちがあることをわかってほしいと思います。

Aさん

○お連れ合いについて教えてください。

1949年生まれで公務員でしたが、57才の時にアルツハイマー型認知症と診断されました。それまでは、仕事もスポーツも大好きで精力的に頑張っていました。徐々にできなくなることが増えてきました。夫はそのような中でも「社会の役に立ちたい」と、認知症家族会などでの講演活動に取り組んでいました。「隠すのではなく、認知症になっても自分のできることをさせていただくことで、多くの方に認知症に対する理解を深めていただきたい。」と考えていました。私自身、認知症を隠すのではなく、一緒に講演会を実施したり、取材を受けることで理解を求めたいと考えていました。現在は病状が進行し、介護度5となりましたが、毎日デイサービスに通いながら、在宅で生活をしています。

○介護する上で心がけていることはありますか。

とにかく、声をかけよう、褒めよう、と思っています。近くに住んでいる両親も、夫と顔を合わせる夕飯の時には、手を触りながら話かけます。そして、着ている服などについて褒めたりもしてくれます。返答はなくても、本人の気持ちに心を寄せながら、共に歩んでいければと思っている毎日です。そして、夫に学ぶことばかりの日々に感謝です。

○周りの人へのメッセージはありますか。

認知症になってもその人の特性は失われません。症状は進行していきますが、その時々を大切に、本人が今何かやりたいと思った時にタイミングの良いサポートが必要だと考えます。現在は車いすで外出しますが、できるだけ周りの人と関わっていき、困った時にはサポートしていただくことで、周りの方々の理解のひとつになればと思っています。